

最高の笑顔と人との距離感 日本とトーゴの 懸け橋になりたい

世界最貧国の一つと言われるトーゴに、今の日本が失った豊さがある

●社会学部 4年次生
辻 旺一郎 さん



約4カ月間滞在した西アフリカ・トーゴ共和国での生活をフォトエッセーにまとめ、講演や企画展など多岐に渡り活動する辻旺一郎さん。資源に乏しく世界最貧国の一つと言われるトーゴにあって、世界有数の経済大国である日本が失いつつあるものとは。両国の懸け橋となるべく辻さんの挑戦は、始まったばかりだ。

辻 旺一郎 一ついおういちろう

■1994年、滋賀県生まれ。滋賀県立草津東高等学校卒。社会学部4年次生。2015年4月、二十歳の時に単身トーゴ共和国に渡った後に「これがトーゴだ。」を出版。高校時代まで野球部に所属。趣味は海外旅行、特技はけん玉。



西アフリカ・トーゴ共和国。日本からの距離は約13,300km、時差は9時間。世界最貧国の一つと言われる国の魅力を、辻さんは日本で発信している。トーゴとの出会いは2015年4月。成人式を終えた辻さんは「二十歳になったら大人になると思っていましたが、全然大人になった気がしませんでした。今ある日常を当たり前と感じたまま大人になるのではなく、一つ一つの物事に対して、明確な思いを持てるようになりたい」と思い、日本とは全く違うアフリカに身を置こうと決めた。「両親が所属していた国際交流クラブと相談したところ、『日本人がトーゴに行った例は聞いたことがない。治安も含めて現地の情報はほとんどないので、お勧めはできませんよ』と言われたので、今の自分にピッタリだと思いトーゴに決めました」と振り返る。

南大西洋・ギニア湾に面したトーゴの首都ロメから北西に約120km。ガーナとの国境に近い人口7万人ほどの都市バリエで、辻さんの挑戦が始まった。現地で話されているエヴェ語と公用語のフランス語の区別さえつかない状況の辻さんに、ホストファミリーがフランス語の家庭教師を付けてくれた。「朝は7時30分から9時前までフランス語を教わり、9時から夕方5時まで職業訓練校で授業し、家に帰って皆でご飯を食べる毎日でしたね。職業訓練校では洋裁を教える立場でしたが、資料集でしか見たことがな

LEADERS NOW!



い足踏みマシンやアイロンで、おまけに言葉も不十分だったので逆に現地の生徒に教えてもらっていました。学校のためにできることはないかと、草刈りやペンキ塗装から広報ビデオ、名刺の作成まで何でもこなした。

日課にしていた人物写真の撮影は2,000人を超えた。「写真を撮って見せてあげると皆喜んでくれました。ある時『なんで撮るの?』と聞かれたので、『トーゴのことを知らない日本の友人に知ってもらうために』と答えたところ、『それなら撮って良いよ』と言われました。街を歩けば見ず知らずの人からあいさつされ、食事に誘われる日々。「あいさつしないと『なんであいさつしないんだ!』と真剣に怒られましたね。一回会えば次からは家に泊めるぐらいのフレンドリーな関係が当たり前で、人と人との距離感の近さに最初は戸惑いましたが、彼らのおかげで4カ月間過ごすことができました。近所でのあいさつやおすそ分けなど、心が豊かになる行為が、今の日本では薄れてきているように感じます。世界最貧国と言われるトーゴですが、経済大国の日本が学ぶべき点は多いです。



帰国後はトーゴ人の笑顔満載のフォトエッセー『これがトーゴだ。』を出版し、講演会や企画展などを通じてトーゴの現状を発信している。トーゴへの情熱が認められ、トーゴ大使館の協力のもと「トーゴの魅力を日本で伝える若者」をテーマとしたドキュメンタリー番組が今秋、現地トーゴで放映される予定だ。「トーゴには水、ゴミ、病気などさまざまな問題があります。将来はトーゴ人の心を大切に、経済発展に貢献できる仕事に就きたいです。日本とトーゴ、お互いの良さを伝えられる懸け橋になれるように」。アフリカのためになるように生きていきたい。明確になった大人の決意を胸に、辻さんは挑み続ける。

「これがトーゴだ。」辻 旺一郎 著
(グラディア 2016年)▶



法の正義、 自己の正義を追求

学ぶ姿勢を忘れず、公正・中立な裁判を

●和歌山地方裁判所 判事補
摸利 純史 さん —法科大学院 2014年修了—

裁判官・検察官・弁護士の法曹三者から裁判官の道を選択した摸利さん。法科大学院で勉強漬けの日々を過ごし、数ある国家資格の中で



最も難関に位置する司法試験に合格。和歌山地方裁判所に着任2年目の判事補が、法の正義・自己の正義を追求している。

プロフェッショナルとして、すべての仕事に責任が伴う。責任の重さは職業・立場により異なるが、裁判官は極めて責任の重い仕事ではないだろうか。当事者をはじめ、関係者の一生を左右しかねない判決を下さなければならない立場。「法の番人」「法の天秤」とも称される裁判官の道を、摸利さんは歩んでいる。「法学部を選んだ理由は特にありませんでしたが、大学入学後、法律の勉強を始めたとしても興味が湧いて好きになりました」。和歌山市の中心部、和歌山城の目と鼻の先にある和歌山地方裁判所の一室で、摸利さんは柔らかな表情で語り始めた。

法律への興味が加速し関連資格を取得するようになった大学3年次、民法ゼミの教授から背中を押された。「ロースクール(法科大学院)に進み、司法試験を受けてみたらどうか?」。この日を境に、法曹三者を職業として意識するようになった。大学時代法律学科を首席で卒業し、関西大学法科大学院法学既修者コースに入学。「大学院に進む以上、親に迷惑はかけられませんから、司法試験に絶対で一発で受からなければならないとの危機感は一層強かったですね。二度目はない覚悟でやっていました」と振り返る。

合格体験談を読みあさり、1日8時間以上の勉強を習慣化させ、ロースクールには携帯電話を持ち込まないと決めた。合格の鍵として与えられた問いに答えられる法的知識や、答案に示す力、答案形式を整える知識、本番で失敗しないための準備を掲げた。法科大学院を首席・総代で修了した14年9月、司法試験に見事一発合格。「私は決してエリートではありません。勉強量を確保し、勉強の方向性を決めて習慣化させたことで、毎日勉強を続けられました。法科大学院は一年中利用できる自習室やロー・ライブラ



摸利 純史—もうり よしふみ

■1989年岡山県岡山市生まれ。2008年岡山芸館高等学校から龍谷大学法学部入学。12年関西大学法科大学院法学既修者コースに入学。14年修了し、司法試験に合格後、司法修習生を経て16年1月、和歌山地方裁判所判事補任官。趣味は野球、ランニング、旅行。

リーなど環境が充実していて集中できましたし、一緒に勉強する友人にも恵まれました。教授の方々も凄く丁寧に教えてくださり、さまざまなアドバイスもいただきました。

恰好良い印象を抱いていた検察官、憧れていた弁護士ではなく、「少しお堅く近寄りた職業」との印象を抱いていた裁判官を志望するようになった。「裁判官は選択肢としてあまり考えていませんでしたが、司法修習期間中に関西大学出身の先輩方をはじめ、裁判官の方々が親切に接してくれました。特に『裁判官は最終的な判断をする者であり、自己の正義を追求できる魅力がある』との言葉で、裁判官への道を決めました。裁判官になるため、年間100人ほどの狭き門をくぐり、現在は和歌山地方裁判所で判事補2年目を迎える摸利さん。刑事事件のうち、裁判員裁判をはじめとする重大事件を担当し、法廷での確かな審理が行えるように、検察官、弁護士それぞれの主張や証拠を整理するなどの公判期日に向けた準備や審理への立会い、裁判員との評議、判決書の起案などの事件処理のほか、逮捕状などの令状発付も行うなど忙しい日々を過ごしている。「裁判所から外に出る機会がほとんどありませんので、運動不足解消のために最近はランニングが趣味になりました」と笑顔を見せる。

「経験を積むにつれて自分の中で慢心や譲れない部分が強くなると思いますが、他の人の意見も取り入れながら柔軟に対応し、いつまでも学ぶ姿勢を忘れないようにしたいです。最終的な結論を決める仕事は責任が重い分、やりがいもあります。法律的正義のもと、自己の正義を追求する。重い法服をまとい、摸利さんは歩み続ける。

LAW and JUSTICE

